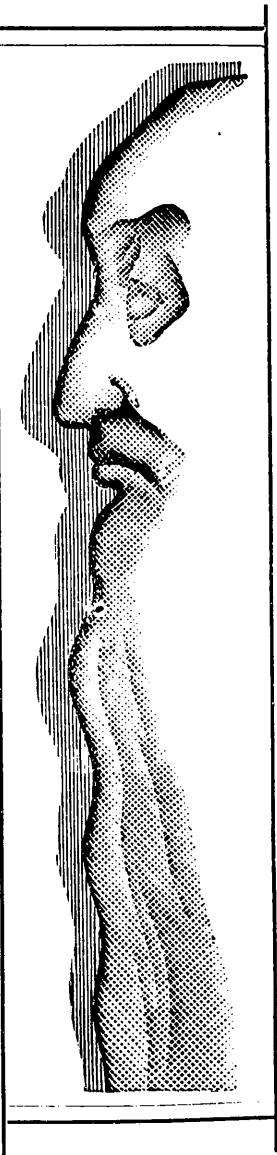


編輯後記

七月十九日に罷業團が高野山を下山し歸阪の途中數十名が檢束され爭議の對策上至難を生じました、之が爲め南海當局は夫を恣に凡ゆる手段をつくして最強硬派と目されし者を懷柔するに腐心して漸く其職に就かしめ、一方には馘首者五十二名を出した。

其間和歌山市内京阪食堂山本氏及島本、宮田氏等の有志者の後援を受け和歌山市在勞働團体の應援の下に和歌山公會堂に於て爭議真相發表及批判演說會を開くと共に聽衆約二千余名の熱烈なる聲援を受け市民大會に移らんごせしごき官憲より市民大會及演說會の決議をも中止された。斯くて最後は大阪府特別高等課長田中省吾氏及山下警部の仲介となりて漸く八月十五日爭議解決した次第であつた。(編者)



爭議團の立場について

柳 原 生

前編に述べた如く昭和二年七月十三日より一週間に亘れる南海電車に於ける、ストライキは、勞働者側の惨敗である。然し乍ら彼の戦ひ眞最中の有様を見るごきに同志會幹部の活動し會員の熱情をもつた行動は、今も尙ほ眼前に映じなつかしく一層思ひを深くするものがあるであらう。

敗軍の將兵をかたらずごきは言へ、彼の世界大戦は何をもたらしたであらうか、武力、富強の兼備をなせる大強國であつた獨逸ですら一時は起つ能はざるまで苦境に陥つた如くに小にしては恰も南海同志會の全勢の當時を顧るごきに獨逸のそれご相等しい思ひを起すであらう。